

## 「吾妻鏡」の台風と

## 津波・高潮

西沢 昭

吾妻鏡の翻訳本を読んでいた時のことです。建仁元年八月十一日の項を読んでいますと、原文は、

「下総國葛西郡海邊潮牽人屋。(海辺の潮、人屋をひく)」です。訳として「台風が来て、葛西では津波が起きた」と記載されています。台風ですら津波が起きることはありません。原因と現象が異なります。別の翻訳本を見てみましたら、こちらでは「高潮」と書かれていました。現在の常識では、地震は津波、台風は高潮と理解されています。「高潮」は台風が原因で、強風と気圧低下により海面が吹き寄せられて吸い上げられ生じた海面上昇と理解され、「津波」は地殻変動などで、海底が変動することに生じる急激な波と理解されています。生じる原因は異なりますし、生じ方も異なります。詳しくは専門書を見てください。しかし昔は津波も高潮もすべて津

波と呼んでいたようです。また津波という用語もそんなに古いものでなく、江戸時代といわれています。それまでは海が沸いたというような海全体が盛り上がるような表現で表されていたようです。それでは台風・津波・高潮の使われ方について時代をさかのぼって見てみましょう。

これは津波であろう考えられる記録は「日本書紀」に見ることができません。天武天皇十二年「大潮高騰、海水颯蕩」は地震とともに記載されており、海水が高く立ち上る現象であることから津波の記録であるとされています。原因は何であれ、このように海水が高く立ち上る現象は古来から記録が残っており、その時々名称が使用されていたようです。では津波という言葉は昔からあったのでしょうか。最も古い記述は、「駿府記」に「政宗所領海涯人屋、波濤大漲来、溺死者五千人、世曰津波云々」とあるそうです。世にいう津波と書かれていますので、この頃は津波という言葉は一般的であったようです。

台風により海で起きる大きな波、現在では「高潮」ですが、戦前ま

でこのことは「津波」といわれていました。戦前の新聞を見ますと、昭和十年ころまでは「台風が来て津波が起きた」という表題が用いられています。台風が来て高潮が起きたという表現は同じく昭和十三年以降から使われ始めたようです。このように、最近まで一つの現象でもいろいろな言葉が使われていました。

さてここで話を再び中世に持ってきます。吾妻鏡は鎌倉時代に書かれた書物で、もとは漢文体で書かれています。国史大系に書かれている吾妻鏡、建仁元年八月十一日のところでは「甚雨午尅大人屋。千餘人漂没云々。」とあります。「台風がやってきて、東京湾奥の葛西では高潮が発生し人や家が流された」といったところで

でしょうか。吾妻鏡のこの部分の翻訳を見てみます。貴志正造氏が現代語訳を行った「新版全訳・吾妻鏡・新人物往来社」(二〇一一年刊)を見ますと、第三巻、五六頁に訳が載っています。ここの注釈には「下総大津波に襲はる」と書かれています。一方、五味文彦氏らが編集した「現代語訳・吾妻鏡・吉

川弘文館」(二〇〇九年刊)第七巻、十一頁に「強い雨が降った。午の刻に大風が吹き、下総國葛西郡の海辺では高潮が民家をさらし、千余人が流され海に没した。」と、高潮となっています。同じ台風の記事なのに、一方では津波、他方では高潮となっています。どうしてでしょう。訳者の貴志氏は一九一八年生まれで、編者の五味文彦氏は一九四六年生まれと世代の違いで翻訳文が変わったのでしょうか、次はこの用語の時代背景を見てみます。

じつは津波も高潮も古くから用いられていた言葉でした。昭和九年に室戸台風が大阪に上陸しました。大阪湾では3mを超す高潮が発生しました。室戸台風の報告書をまとめるときに、台風により海面が上昇する現象を表現する用語として議論があり、当時関西で使われていた「高潮」と関東で使われていた「津波」をどのようにまとめるかということで、関西で使われていた「津波」を用いたそうです(気象ハンドブック831頁)。しかし戦争の混乱により普及するのは戦後になってからでした。それまでの間は「津波」と「高

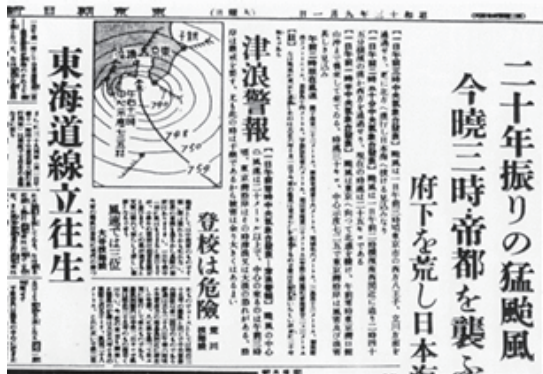
「潮」は混在していたようです。昭和十三年の東京朝日新聞の台風記事には「気象台から津波警報が出ており、津波または大浪の恐れがある」と記述されていますし、次の日の同新聞では「高潮」と記述されています。このことから戦前では「津波」「高潮」の明確な区別はなかったようです。

このことを踏まえ、吾妻鏡の訳の違いを検討してみますと、貴志氏の訳の方が五味氏の訳より古いことが分かります。そして貴志氏が翻訳をする頃は、「高潮」と「津波」の用語上の区別がはつきりしなかった昭和初期から戦後（一九五二年に津波予報開始）の混乱期以前に行われたこともわかります。翻訳に携わった両先生が、用語の時間的経緯を知っていたかどうかは分かりませんが、技術用語などは時代とともに定義が変化しますので、時代背景を映した翻訳であることがよく分かる史料かと思えます。

したがって、古い資料を解釈する場合、その発生原因が何であるかにより現在使用されている用語で表記をしないと、時には誤って読み手に伝わってしまうことがあ

ります。

前述の吾妻鏡の翻訳にしても、時代に応じて用語を分けて翻訳したのか、それとも用語の理解が進まず昔の考えで翻訳をしたのか。疑問が残る本です。気象予報士が斜めから歴史の本を読んでもました。新しい見方ができると思いません。



(右の写真は昭和13年9月1日朝日新聞の記事)

